



アルコール依存症の地理学的研究－医療・自助グループの展開と依存症者の「癒しの場所」－

中島，芽理

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2025-09-25

(Date of Publication)

2027-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第9278号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100498318>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論 文 内 容 の 要 旨

論文題目 アルコール依存症の地理学的研究
 —医療・自助グループの展開と依存症者の「癒しの場所」—

氏 名 : 中 島 芽 理

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 原 口 剛 教授
 (副) 菊 地 真 准教授
 (副) 茶 谷 直 人 教授

本研究は、アルコール依存症者を対象に、飲酒が当事者にとってどのような意味や支えを持ちえたのか、また依存症の進行に伴ってそれらを喪失した後、いかに新たな支えを再構築していったのかというプロセスに着目した。とりわけ、当事者を取り巻く関係性や、それを支える医療・福祉制度の歴史的背景に注目しながら、依存の深まりと回復に伴う生活の再構成を、地理学的視点から明らかにすることを試みた。

健康地理学における「癒しの景観 (therapeutic landscapes)」概念を批判的に継承しつつ、場所を関係的かつ動的なプロセスとして理解する視点から、新たに「癒しの場所」という概念を提起した。また、本研究でいう「癒し」とは、生物医学的な「治療」や一時的な安堵感にとどまらず、場所において生じる感情や情動、社会的経験の総体として捉える。

この視座を踏まえ、本研究の目的は、依存症の進行と回復という一連のプロセスにおいて、当事者にとっての「癒しの場所」がいかに生成・変容してきたのかを明らかにすることである。特に、依存症当事者で構成される自助グループの歴史的文脈と、そこでの実践や関係性、それらを規定する権力構造に着目した。

こうした場所の変容を分析するために、本研究では日常生活における複数のリズムに注目する「リズム分析」を導入した。アルコール依存症は、飲酒のコントロールの喪失を主症状とする慢性疾患であり、病的な飲酒と日常的な飲酒の境界は明確ではない。そのため、当事者の個人的な経験における実践の変化に着目した第4章および第5章において、リズム分析は有効な方法論となった。

地理学におけるアルコール関連研究の多くは、政治経済的・病理学的観点から消費空間や生産現場に焦点を当てる傾向があり、飲酒行為や依存に至る過程を扱った研究は限定的である。また、「癒しの景観」研究においても、公的な治療環境に注目がなされる一方で、自助グループのような施設外の実践には十分な検討がなされていない。このような研究上の空白を踏まえ、本研究では依存症者の日常に根ざした実践に注目し、「癒しの場所」という概念を手がかりに、当事者の語りや支援制度の歴史的展開を通じてその様相を検討した。

本研究が対象とした自助グループは、アメリカ合衆国で発足した **Alcoholics Anonymous (AA)** と、それを基礎に日本的展開を遂げた全日本断酒連盟 (断酒会) である。両者の大きな違いは家族の関与のあり方にあり、AA が家族を別組織 (**Al-Anon**) に参加させるのに対し、断酒会は当事者と家族がともに会合に参加することを重視してきた。また、両組織は男性を中心に構成されてきた経緯があり、自助グループ内においてもジェンダーに基づく非対称性が存在している。そのため、女性専用の会合が設けられてきた。

本研究では、アルコール依存症者の「癒しの場所」を捉えるため、複数の方法を用いて多角的に分析した。第3章では、1970年代前後を主たる対象時期とし、自助グループや医療制度の変遷に着目して、新聞・雑誌記事や機関紙などの資料を用いて言説分析を行った。また、依存症当事者、医師、支援関係者への聞き取り調査の結果も併せて用いた。第4章および第5章では、アルコール依存症者の主体的な経験を明らかにするため、当事者に対してライフヒストリー・インタビューを実施した。

第2章では、「癒しの場所」というという概念の有効性と、それに基づく理論的視座の構築を目的として、関連する先行研究を批判的に検討した。具体的には、①都市空間におけるアルコールや薬物の使用、②女性の飲酒・依存とジェンダー構造、③ケアの地理的変容と「ホーム」の再考、④ホームにおける暴力と飲酒、という4つの視点から議論を整理した。

これにより、依存症に関わる実践は、空間的・社会的な関係のなかで構築される動的なプロセスであること、また、「癒しの場所」という概念が、当事者の日常的経験の多様性や可変性を捉えるうえで理論的に有効であることを示した。

なかでも、ジェンダーや異性愛的家族規範が当事者の経験に及ぼす影響に注目し、ホームでの実践や、再生産労働を担う女性、家族規範のもとで周縁化されやすい男性の経験にも焦点を当てることで、「癒しの場所」の多層的構造を明らかにするために重要な分析軸となることを論じた。

第3章では、1960～70年代の大阪府の釜ヶ崎および東京都の山谷を中心に、アルコール依存症の医学的対応と自助グループの展開を、「癒しの場所」の観点から分析した。日本のアルコール医療と断酒会は、まず家族を持つ男性依存症者を対象に構築され、単身男性は排除の対象となった。それゆえ、単身男性労働者に特化した地域である寄せ場において、「問題」として前景化していった。

山谷では、断酒会や医療機関の限界が新たなアクターを生じさせ、AAが展開した。一方、釜ヶ崎では医師を軸に断酒会・行政・民間福祉団体が連携し、単身男性の回復が模索された。この活動を基盤に、断酒会の手法を中心とする「大阪方式」が確立されたが、同方式は他の治療法を排除する側面も有していた。

このように、アルコール依存症者にとっての「癒しの場所」は、地域における主体の付置によって異なる展開を見せ、回復の場であると同時に、特定の属性を排除する側面をもつ多面的なプロセスであった。また、これらの「癒しの場所」が、一貫して男性中心に構築されてきた点も重要である。

第4章では、男性アルコール依存症者のライフヒストリーをもとに、リズム分析の視点から、「癒しの場所」の生成や変容を考察した。飲酒のリズムが加速するにつれて、社会の規範的なリズムとの齟齬が生じ、飲酒により生じていた場所としての意味は次第に失われていった。その背景には、経済的困難、人間関係の悪化、「男らしさ」に関する葛藤、さらには依存症に対する社会的認識の乏しさといった複合的な構造的要因があった。

回復過程では、依存症者は自助グループや非公式な集まりを通じて、社会生活のリズムに準拠しながら主体的に関係を構築することで、新たな「癒しの場所」を生成していった。例えば、マクドナルドのような「没場所性」の象徴とされる空間も、個人的なコミュニケーションを充足する「癒しの場所」としての機能を果たしていた。さらに、祈りのような身ぶりの反復から生じる自他の生への肯定からも、「癒しの場所」が立ち現れていた。

一方で、回復の過程では、強固な男性性や、喪失感・恐怖といったネガティブな感情も新たに生じており、回復とは単にポジティブなものではなく、常に揺れを伴う複雑で両義的なプロセスであった。

第 5 章では、女性依存症者の経験を取り上げ、特にホームにおける家族やパートナーとの関係に着目しつつ、「癒しの場所」の変容を考察した。第 4 章の事例との比較から、依存症の進行や回復過程におけるジェンダーによる共通点と相違点を明らかにした。共通点として、飲酒は当初、新たな関係や空間をひらく「癒しの場所」として機能していたが、飲酒のリズムの加速により、次第に身体や関係性を損なうものへと変質した。回復過程では、自助グループでの関係構築が新たな「癒しの場所」となり、複雑な感情の交錯を伴いながらも回復のリズムを支える基盤となった。

一方で、ジェンダーに起因する差異は、支配的に作用するリズムのあり方に現れていた。男性の場合、生産労働のリズムからの疎外が飲酒を深める要因となっていた。しかし、ホームでは経済的優位性により一人の時空間を確保し、比較的自由に飲酒を逃走の手段として用いることが可能であった。これに対して女性は、ジェンダー規範や、家族やパートナーといった親密な他者のリズムへの過剰同期が抑圧的に作用し、飲酒を隠さざるを得なかった。女性にとっての飲酒は、関係維持の手段であると同時に、親密な関係のなかで他者のリズムに完全に吞み込まれないための抵抗でもあった。

自助グループに参加後も、女性は家族や男性のリズムに巻き込まれやすく、スポンサーシップや女性ミーティングを通じてシスターフッドを形成し、自律的なリズムを再構築する必要があった。この過程において、女性にとっては強固なジェンダー規範を手放すことが重要な課題であった。他方で男性は、感情の開示や受容といった「女性化された実践」を通じてジェンダーの再構築を試みる一方で、暴力性を含む「男らしさ」が容易には変容しない事例も確認された。このように、依存症からの回復とは、単なる断酒の達成にとどまらず、自助グループのなかでジェンダー規範や「コントロール可能な身体」といった社会的要請を問い直し、それらを揺さぶる動的なプロセスでもあった。

第 6 章では、これまでの議論を踏まえ、依存症の進行および回復の過程において「癒しの場所」がいかに立ち現れていたのかを総括した。実証分析を通じて、「癒しの場所」は医療や福祉といった制度的空間に限定されず、日常の実践や他者との関係性のなかで編み直される、相互作用的かつ動的なプロセスであることを明らかにした。特に、安定や安心といった肯定的側面に加えて、喪失や葛藤といった困難な経験も含む「癒しの場所」の多面性と流動性は、従来の社会規範や制度的枠組みに対する批判的なまなざしを促す契機となりうることを示された。同時に、「癒しの場所」は政治的な含意を帯びており、異性愛核家族を前提とした家族規範や、それと結びついた資本主義的家父長制のもとでは、単身者や女性が「癒しの場所」から排除されやすい傾向にあることも明らかとなった。

加えて、回復の過程における「癒し」の意味を、「ケア」や「回復」といった類似概念との関係性のなかで理論的に再考した。とりわけ、他者と対等に支え合う自助グループの実践

において、ケアが応答的・他者中心的な実践として捉えられるのに対し、癒しは、自己と他者が相互に変化しうる関係のなかで生じるプロセスとして理解された。こうした癒しは、可視的な目標となりやすい回復を意味づける実践としても位置づけられる。

今後の課題としては、家族同伴が前提とされる断酒会における女性の回復過程の検討が挙げられる。また、性的マイノリティをはじめとする、制度的支援から周縁化されやすい人々の経験にも目を向けていくことも重要である。

論文審査の結果の要旨

氏 名	中島 芽理
論 文 題 目	アルコール依存症の地理学的研究—医療・自助グループの展開と依存症者の「癒しの場所」—
要 旨	
近年の人文地理学においては、障がいや医療、ケアなどの主題は国内外の研究における中心的課題となっている。しかしながら、アルコール依存症や医療・自助グループを対象とした研究は、社会的に重大な課題であるにもかかわらず、世界的にも研究が少なく、国内でも研究対象として扱われてこなかった。このような問題意識のもと本研究は、アルコール依存症の進行と回復というプロセスにおいて、当事者にとっての「癒しの場所」がいかに関与・変容してきたかを明らかにすることを目的とした。 第 1 章では、本研究にとってキー概念である「癒しの景観／場所」について主として健康地理学の分野で積み重ねられてきた国内外の先行研究をレビューし、また、それら先行研究の限界を乗り越えるべく「場所」概念をめぐる議論、および「リズム分析」をめぐる研究動向をレビューした。これらの知見を踏まえ、依存症という「病」を当事者の経験に則して分析し、かつ回復の過程を動的プロセスとして把握するための理論的・方法論的視点を提示した。 第 2 章では、依存症者にとっての「癒しの場所」をより深く理解するための理論的枠組みを導出することを目的に、関連する先行研究を批判的に検討した。具体的には、①都市空間における AOD の使用、②女性の飲酒・依存とジェンダー構造、③ケアの地理的変容と「ホーム」の再考、④ホームにおける暴力と飲酒、という 4 つの視点から議論を整理した。これらの検討を通じて、飲酒に関わる実践は、空間的・社会的な関係のなかで構築される、関係的かつ動的なプロセスであることが明らかとなった。また、公的な治療環境だけでなく、日常生活における実践にも注目する必要がある、特に、こうした実践が他者との関係性の中で流動的に再編され、感情や身体感覚を伴って経験される点に着目すべきことが示された。こうした経験を捉えるうえで、「癒しの場所」という概念は、理論的に有効な枠組みとなった。加えて、ジェンダーや異性愛的家族構造といった社会規範が、依存症者の経験に深く作用していることが明らかとなった。 第 3 章では、1960～70 年代の大阪府の釜ヶ崎および東京都の山谷を中心に、アルコール依存症の医学的対応と自助グループの展開を、「癒しの場所」の観点から分析した。日本のアルコール医療と断酒会は、家父長制的な飲酒文化を背景に、まず家族を持つ男性依存症者を対象に構築された。単身アルコール依存症者は、既存のシステムに包摂される程に排除の対象となった。それは、単身男性労働者に特化した地域として構築された寄せ場において、「問題」として前景化した。この背景には、どの身体が「癒されるに値するか」という規範に基づく選別があった。山谷では、断酒会や医療機関の限界が新たなアクターを生じさせ、依存症者であるアメリカ人神父を中心に、AA という組織が展開した。釜ヶ崎では医師が軸となって断酒会や行政、民間福祉団体に対して働きかけが行われ、単身アルコール依存症者の回復が目指された。この活動を基盤に、断酒会の手法を中心とする「大阪方式」が確立されたが、この方式は他の治療法を排除する側面も持っていた。このように、アルコール依存症者にとっての「癒しの場所」は、社会や医学から周縁化されてきた人びとが回復への足がかりを得る重要な場となった。他方で、それらの場所は中立的でも普遍的でもなく、地域のアクターや社会規範に規定される中で、排除や規律化の装置としても機能していた。とりわけ重要なのは、こうした「癒しの場所」が一貫して男性中心に構築されてきたという点である。 第 4 章では、男性アルコール依存症者のライフヒストリーをもとに、リズム分析の視点から、「癒しの場所」の生成や変容を考察した。依存症者は当初、飲酒を通じて「癒しの場所」を生み出していた。しかし、飲酒のリズムが加	
主査記載 氏 名	原口 剛

速するにつれて、社会の規範的なリズムとの齟齬が生じ、場所としての意味は次第に失われていった。その背景には、経済的困難、人間関係の悪化、「男らしさ」に関する葛藤、さらには依存症に対する社会的認識の乏しさといった複合的な構造的要因があった。回復過程では、依存症者は自助グループや非公式的な集まりを通じて、社会生活のリズムに準拠しながら主体的に関係を構築することで、新たな「癒しの場所」を生成していった。マクドナルドのような「没場所性」の象徴とされる空間も、個人的なコミュニケーションを充足する「癒しの場所」としての機能を果たしていた点は注目に値する。さらに、祈りのような身ぶりの反復から生じる自他の生への肯定からも、「癒しの場所」が生成されていた。以上から、回復とは単にポジティブなものではなく、喪失感や恐れといったネガティブな感情とも折り合いをつけていく、複雑で両義的なプロセスであることを示した。

第5章では、女性依存症者の経験を取り上げ、特にホームにおける家族やパートナーとの関係に着目しながら「癒しの場所」の変容を考察した。第4章で分析した男性依存症者の事例との比較から、依存症の進行や回復過程におけるジェンダーによる共通点と相違点を明らかにした。とくにジェンダーに起因する差異については、支配的に作用するリズムのあり方に現れていた。男性の場合、生産労働のリズムからの疎外が飲酒を深める要因となっていた。しかし、ホームでは経済的優位性により一人の時空間を確保しやすかった。これに対して女性は、ジェンダー規範や家族やパートナーといった親密な他者のリズムへの過剰同期が抑圧的に作用し、飲酒を隠さざるを得なかった。女性にとっての飲酒は、その場にとどまり関係を維持し続けるための手段であると同時に、自己のリズムをかわろうじて維持するための抵抗でもあった。自助グループの男性中心的な性質ゆえに、女性は参加後も家族や男性のリズムに巻き込まれやすく、自身の回復を優先するには、スポンサーシップや女性ミーティングを通じてシスターフッドを形成し、自律的なリズムを再構築する必要があった。この過程において、女性にとっては強固なジェンダー規範を手放すことが重要な課題となっていた。このように、依存症からの回復とは単なる断酒の達成にとどまらず、ジェンダー規範や「コントロール可能な身体」といった社会的要請を問い直し、それらを揺さぶる動的なプロセスでもあった。重要なのは、こうした営みが、自助グループという集団的实践の中で展開されている点であった。

本研究を通じて明らかになったのは、依存症の進行や回復における「癒しの場所」とは、日常生活における反復的な実践や、他者との社会関係を通じて構築される、関係的かつ動的なプロセスとして立ち現れることである。特に、当事者の語りやリズム分析を通じて、「癒しの場所」が周囲との関係性の変化を介して肯定的な意味づけをもたらす一方で、身体を傷つける場にもなり得ること、さらには喪失感や自己嫌悪、不完全さの受容といった複雑な経験や感情を伴うことが明らかになった。このような「癒しの場所」の多面性と流動性は、従来の社会規範や制度的枠組みに対して、批判的なまなざしを促す契機ともなっていた。加えて、「癒しの場所」は決して中立的なものではなく、そこには常に政治的含意が伴っていた。とりわけ、異性愛核家族を理想とする家族規範や、それに結び付いた資本主義的家父長制のもとでは、単身者や女性が「癒しの場所」から排除されやすい傾向にあり、この点にも十分に注意を払う必要があるとの知見が得られた。

本論文は、「アルコール依存」という問題に対し、最先端の地理学理論を踏まえた研究枠組みと粘り強い参与観察によって迫り、きわめてオリジナリティの高い知見を導き出した研究成果として、高く評価される。以上の審査結果により、審査委員会は論文提出者中島芽理氏が博士（文学）の学位を授与されるに値するとの結論に達した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	原口 剛	副 査	教授	茶谷 直人
副 査	大阪公立大学現代システム科学研究院教授	福田 珠己	副 査	准教授	菊地 真
副 査	教授	平井 晶子			